

詩学講義無

限の
エ
コ
ー

吉
増
剛
造

慶應義塾大学出版会

詩学講義
無限のエコ

目次

- (一) 中原中也からはじめて 5

補習 (一) Conférence à Strasbourg 57

- (二) 石川啄木へ 69

- (三) 柳田國男の声の方へ 95

- (四) 裸の異語へ 135

補習 (二) Exceptional Poet—Ryuichi Tamura 175

(五) 歌の足音の方へ
189

(六) 瀧口修造ノート、道路へ
229

(七) 耳なし芳一の方へ
273

(八) 一^{ひと}ふき風の木の葉^こしづまる (芭蕉)
321

(九) 萩原朔太郎——ヴィジョンの下底^{ソコ}
359

(十) 萩原朔太郎——恐ろしい山、詩の穴
389

(一) 中原中也から始めて

承前、……。

二〇〇九年度慶應義塾大学「詩学」(久保田万太^{（久保田万太）}は四月十三日に文学部仏文学専攻の牛場曉夫教授による開講の辞によ
ってはじめられた。本稿は講義の日の朝^{（アッシュ）}（もしくは、前日、前々日から）に綴られた「原稿」(「原稿」は「原稿」^{（原稿）}と仮に付けられた
コピー^{（コピー）}に配布されるもの、……本文中カラ
ーページ参照後に「授業譜」と呼ばれる)を講師が読み解(ほど)くこと、そして「三田文学」編集部の姉川睦美さんによる、注
意深い「聞きとり」に、更にそれに手を入れることによって書かれたものである。「教室の庭」にもやがて野の小径、
……あるいは渚、汀(みぎわ)が姿をあらわし、……特に独文の内田賢太郎さんが、さらに「中也のことを、……」
と黒板、教壇の岩蔭のようなところに近づいて来て下さったところで、「お教室」の性質と言おうか、道^{（ミチ）}の辺の空気が
がみるみる変っていった、……。そしてこの「お教室」は、前年度まで筆者が深い経験をするようになった、……
六年間の早稲田大学での「教室の庭」の香り^{（香り）}の再^{（再）}聴取と再^{（再）}記述の試みでもあったのであって、何故このよう
な隘路(狭い通路、迂路、……)をとることになったのかの、乏しいものなのでしょうが若干のご説明を試みてみた
と思う。そう、先ずこの標題が決った経緯について。「詩学」第七回(二〇〇九年六月二十九日)これが「夢のシーン」のひとつの
変奏でもあったのだが、三田にフランスで活躍中の詩人、翻訳家である関口涼子さんを「お教室」にお招きをした、
……。そのときに綴ったメモ(nakedwriting)の一節に、かつて共著として上梓した『機^{（はた）}——ともに震える言葉』(二〇六
年書籍山田刊)の掉尾で関口涼子さんが引用をされた、エドモンド・ジャベスの次のような言葉……の、これまた僅かな変奏
あるいは「再^{（再）}点すだ^{（点すだ）}」(こんな言葉は勿論ないのだが、……)があった。ジャベスと言う「言葉を聞くということ
は、なによりもそのこだまのうち、その無限の延長のうちに言葉を聞くことだ。本とは、それらにむけて耳をすます
ことでつくりあげられる」(百三頁)。「ユリイカ」という雑誌で「今月の詩」を選んでいたそのときに一度だけ高校生
の関口さんの名があったのだ、……。 「十七歳の美しい娘、……」との幻のシーンのエコーも重なっていた。その夢
のエコーの小径の筋にも再(また)分け入りたかった、……。さて、最後に優れた^{（おし）}教えびと^{（ふと）} (ふと、こんな言葉が頻ってきて
いました、……これではあんま

りだから、*girl* も響かせて居こう、……。"（*reader*）を、「書物の林の奥から」のお声を聞くようにして、この優れた「教えびと」の名には、仕込む人（女性）が住んでいる、……。"を口遊むようにして心中に列挙してみてもこの「承前」を了える。いつからか、講演、座談、対座等の録音テープを必ずき返すようにしていて、きき返す、……。あるいはきき漏らしをたしかめるようになっていた。耳の澄まし方のアンテナの震え（あるいは風の向き）……。をたしかめ返す、……。と言えは当るのか。くり返し聞くその都度その都度、響きあるいは風の様子は変る。そのことの果て知れぬ言語化もまたこれからの、……。そして本稿の紙上で「三田文学」連載時）の試練であった、……。この「承前」は、その意識化の試み端緒であった。

チュウヤをナカヤと呼び変える

今日お話をいたします中原中也、……わたくし自身もナカハラ・チュウヤとしか読んでこなかった、……あるいは「チュウヤ」としか読んでいなかったことに、少し羞かしい気がして、唐十郎さんの胎内で響きつづけてきていたらしい、「ナカハラナカヤ」あるいは「ナカヤ」呼び変えるという、記憶のつくりかえを今日からいたします。こんな戸口、……思いがけなく、変った小さな柴折戸を押して別の（人の、……）お庭に這入って行くことになるうとは、……。これも決して容易な作業ではない筈です。はじめは中也さんに対してすばらしい洞察を示した作家の町田康さんに触れながら、彼が出演をしたNHK制作の番組の支度をしてと考えていたのですが、それをやめて、（教室右手のOHPスクリーン、畳二帖分位を見ながら）今日の最後で「春日狂想」という作品を読みます。その中に帽子を真田紐で編むなんてフレーズが出てきますけどね、これ、こういう帽子をなんだなあ。そうか！ それでこんな帽子被ってるんだ！ いっつも日の下を歩いてた「ナカヤさん」のこの帽子が、標（しるし）だったのね……。いまそれがわかりました、……。あそこ（黒板のところ、……）に「En-fax」（20号、扶桑社刊）という大型の雑誌を立て掛けておきましたが、「陥没の場所で聴く世界の響き」と題して秋山駿さんと「新潮」の元編集長の坂本忠雄さんとわたくしとで中原中也さんについての鼎談をした号です。おそらくそこで初めて、……目を開かれた、中原中也についての今日は話になるのだと思われます。

時間がきつと足りなくなるので、……しかし慌てずに。ここからかなり本気になって三日間程集中



中原中也 (18歳頃)

して書いてきましたテキストを読みにかけていきます。今日はさら(更)に(新しい)目で、サラ、……は、きっと、これはヤクザっぽい言葉でしょうね、マッ新(まっしん)……。なるべく読んだ方々の目を、すぐ脇に感じさせないように、……(と、言たって、中也さんについてはものすごい量の本が書かれていますから、たいへんな人気がすしね、そんな新(あらた)な、……目で……)改めて中也さんを見てみたいものだと言ったって簡単にできるものではないですよ)しかしそうありたい、……といささか我が心に念ずるようにして、ゆっくり時間をかけてと、思い決めまして、少し早めに先週の火曜日からずっとこのメモを綴って居りました。そして気がつきますと、歩きながら考えていて、歩きながらと言いましてもわたくしの場合は、このときは、……室内でしたけど、……(そうか、キルケゴールやロートレアモンのように、「室内」でも、……よいのだな……)中也さんの歩行の謎をなんとしても彼の実際の詩作を通して掴んでみようとする、……渾身の、自分で言うのもおかしいことですがおそらく必死の試みだったのだと思います。で、「歩行」ということを言いますと、アルチュール・ランボオばかりではなくって(だいたい詩人にはそういった歩行者が多いんですけれども、……)物書きさんばかりではなくてブッダも、それからマハトマ・ガンジーもそうでしょうね。それとわりあいポピュラーになってきた、人気者となってしまうている俳人山頭火にとっても(ちなみに山頭火は中原中也と同じ山口の湯田の人です。酒屋の倅(せがれ)でね、だからでしょうね大酒飲みでしたけどね)「歩いて行くこと」こそが、彼の、……その命の中心にあったのではないのか。「歩行禪」という言い方をしたりもしますが、そんなこと言わなかったっていい……あるいはわれわれの命の近いところにも「歩いて行くこと」があるのではないのでしょうか。そ

うしてランボオだとかカンジーだとかいう名前よりも、数千年数万年ヒトがして来ていたらしい「歩いて行くこと」がどこかで（これは先に自分の手先が書きちゃってしまいますけれどもね）壊（こわ）れてしまっているらしい。そんなことをほとんど茫然と歩きながらあるいは歩くようにしながら考えていました、……。まあもちろん書いてる時は坐って考えているんですけども、このことは当り、あるいは中^{あた}り、……。これは「直観」ということだけではなくて、「直観の風のようなもの、……」「直観の空気のようなもの、……」を頼ったの近くに覚えて、どうして覚えたのかそれ（「直観の空気のようなもの、……」）をも一緒に（このとき瞬間にこういう空気が生まれたんですね）追尾をしつつこの「お教室」を目指して綴っていくことになりました。これがまた一期一会の試練なのです。「一期一会」って言葉がどうしてかわたくしは好きで、昨日の新聞（日本経済新聞二〇〇九年四月二十六日朝刊）の記事の中でも唐十郎さんとの出会いを「一期一会」となんということでしょうね、……。わたくしは二度も使っていました。唐十郎さんにとっては喜んでくれましたけどね、昨日の夜は大阪のお寺で一緒に打上げのお酒を飲んでいました、……。

毎日々々歩き通す——中也の歩行

詩の秘密はどこにあるのか。漢詩文に「汗牛充棟」という、……普通人が書齋人を皮肉ってでしょうね、言い方しませんが、……これとってもいいですね。めっちゃぎしりとたくさんの解説書だとか解釈（中原中也の場合なのですが）などで、身動きならなくなったことを言うのですね。中原中也というひとは一九〇七年（明治四十年）山口市の、……例のSLの山口線の湯田温泉（とってもいいところですよ）のお医者さんの家に生れて、一九三七年（昭和十二年）、——そうかこの没年がなかなか微妙なところだなあ、三十歳で脳の病気で死んじゃうのですね。中原中也の詩の秘密はどうやらここにあるらしいと気が付きましたのは一昨年のことでしたが、先

程ご紹介し黒板にも立て掛けましたあの雑誌が、評論家の秋山駿さんとわたくしがゲスト、元「新潮」の坂本忠雄さんがホスト役を務められて、毎回テーマを設けて鼎談をされているシリーズ、……ほとんどが「文壇」の方々でお名を挙げてみますと、太宰治、川端康成、小林秀雄、谷崎潤一郎、三島由紀夫、坂口安吾、江藤淳、……等々、……綺羅星のごとし、……という形容があたりますね、文士、……というよりも名士、……。対話者も石原慎太郎さん、古井由吉さん、福田和也さん、坪内祐三さん等、……いわゆる「文壇」のもっとも激しい渦のようなところにいる方々の文人をめぐっての対話集で、詩人は中也さんたったひとり、歌人は与謝野晶子さんという構成でした。ところでこの「詩学」の何回目かで深澤七郎氏の名作『檣山節考』はひとつの名歌集だ、……ということをお願いしましたが、それとは知らずに驚くべきことだ、……と呟くようにして、この「新刊書」を繙いて居まして、それがすでにこの書のなかで嵐山光三郎氏によって指摘されていたことを知りました、……。急いでもっとも高価でしたが深沢氏ご自身による「歌」の——CDも入手いたしました、……。『歌』へ……。(『二〇〇九年八月刊行』「文学の器」扶桑社) どうして、わたくしにご指名がありましたのか、坂本さんのご意志か、「cortex」の編集長でした壱岐真也さんが考えられましたのでしょうか、……。中也(ななかや)さんには、^{さき}「新の……」 わたくしに矢が当りましての中也(ちゅうや)をめぐる座談をしていた時のことです。秋山駿さんの名著と言ってもよい『知れざる炎——評伝中原中也』(講談社、文芸文庫)(これ「知られざる」じゃないですよ、……。)、最初の方でこんな箇所と出会いました、その刹那にみなさんだったらどんなシーンと光、……を想像されますか。こんなところにぶつかりました。大正十二年、中原中也十六歳の時の記述(『詩的履歴書』)。それは町田康さんの優れた着眼に触発されて、弟のアーチャン二つ下の仲良しのアーチャンが子供の時に死んじゃって、それが中原中也の胸というか身体の下底にもものすごい穴、……というのか深淵をつくって、それと「落第」をしたということも大きかった……。そういう、命の陥没するようなことが中也のなかにはあるんですけれども、それとは別に、「大正四年より現今

迄の制作詩篇約七百。内五百破棄。」、……（ここでわたくしが「話」を、折ったというか、……「中断」したことが内田賢太郎さんの心にエコーを誘い、……「お教室」に別の汐のながれが、生じることとなった、……）と書いて、「大正十二年より昭和八年十月迄。毎日々々歩き通す。読書は夜中、朝寝で正午頃起きて、それより夜の十二時頃迄歩くなり」と。

ここです。とくに中程の「毎日々々歩き通す」これは中也さん自身がここを書き記した時に感じたであろうトーンが、……『通す』がだな、……それが間違いなく聞こえてくる気がしたのです。ということとは、……と、自分の思考にも波紋をつくって考えるのですが、この口調というか「トーン」というのか、ここから中也さんのこっそりとした（自らはそうとはもしかしたら気が付かなかったような）決心とか決意に似たものも伝わってくるのではないのでしょうか。そして中也さん（ここは「ナカヤさん」かな……）の言う通りだとしますと、正午から夜の十二時までつまり十二時間、ほぼ歩きづめるという光景を思い浮かべると、ほぼ十二時間郊外にいたことだけは確実に言えてここから中也さんといえどなたもが感じられたことがあるでしょう……そう、こんな言葉はないのかもしれませんが、一種異様な「そとのひかり性——外光性」が、おそらくこの十二時間の歩きづめということから生じてきているらしいことに気が付きます。緩りつつありました、……三行位前を五分程前に通行していました時にはみなさんに「中也さんのこの歩行に姿を想像されるでしょうか」というふうに問いかけながらこの文章を進めるつもりだったのです。しかし書いているとても貧しいわたくし自身の詩的な、解釈というより絵を描くというようなふうにして造型していく力もはたらきはじめてきていて、それによってどこからか光が射ってきて、おそらく外から光が射して来て中也さんの詩全体（直観から射してきたんでしょうねえ）を覆っている稀有な光その外光性に気が付いたようです。

「通す」ということが鍵なのかも知れません。「通り」でもあり、「裏通り」も、「袋小路」も、「行き止まり」も

あった筈の「通り」が、刹那に中也（なかや）さんの脳裡をかすめたに違いありません。で、こういうふうにして書いていく時に生じてくる直観が現れるはたらきというのは、あんまり正確に書いてると出てこなくて、こういうふうになんか撓（たふ）めて少しルーズに目をつぶるようになって書いていく時に、出てくるようなものなのだろうと感じていました。

もしもそういうことが起るのだといたしますと、中也さんという別世界、他界から、あるいはもう人が亡くなってしまった世界から聞こえるような少し奇妙な呼び声と言いますか、そうした発声、あるいは掛声のように聞こえていました、おそらくもっともよく知られていると思われる不思議な声、それはたとえば「ホラホラ、これが僕の骨だ」というそのカタカナで書いてます（カタカナに声のレベルはあるかもしれませんが）それが、実に美しい、実に初々しい外光性ないしは外界性にある……というよりも、（自分で書いてそれを否定しながら書いて行くんですけどね、……さらに、延長して行くような、……そうか「無限」とは、その「運動」のどこか！）その空気の波動が伝わって来るような気がしてきていました。で、こうして書いて行きながら、射してくる光によって読んでいきますね、……。「骨」の次の連の中原中也の歩行のモーションによって曝（さら）しだされる洗いたてたような世界を読みますが、しかしこのはたらきが、実に多岐にわたって（本本当に阿修羅みたいないろんなふうなモーションが動くのね）命のはたらきと交差しているらしい、その芽が茎か枝の、……それぞれの独特でまたとない無二の、ひとつとして同じものはないだろう無二の果てしない、……涯（はて）で知れぬような生まれ方、生（な）成（せい）を感じしようとするのが主題であって、詩中の一情景としてのみとらえるのではない径（みち）（ち）をわたくしたちはこれから辿（たど）ってみます（このへんになってきますと自分の頭で考えているのか書き手の声を辿っているのか、あるいはその中間を辿（たど）っているのかわからないようなそうした記述になってきています）。

不思議な声「ホラホラ、これが……」

「ホラホラ」、こうした不思議な発声に続く連はこうでした。……と書いているときは（スミマセン。二〇〇九年四月二十六日、午後一時三十分発の「のぞみ33号」に乗っていました、新幹線^{（最近揺れが少ないから書けるんですけど）}で）、その引用して縮小して貼り付けてという細かい作業は、勿論車内ではできないものでして、それでごめんさい、わたくしの書く字の声も揺れて……揺れてと書くようとしておそろく「壊して」と書くようになっているような心も作用しているように見えて、字が「壊れて」見えますが、そうかわたくしたちは「壊れたひと」に、なってきたりするのもかもしれません。そういうことを感じて書いてしまうのは、すぐに自分でも書くことと思っていたのかあるいは直観が迫って来ていたのか、中原中也さんが「グレタ・ガルボに似た女」と言ったひと、長谷川康子さんにわたくしも二十代の頃に、出会ったことあったなあ。びっくりしちゃった。小林秀雄なんかえらくなっちゃって名を遂げたけれども、あそこで掃除しているひとが長谷川康子さんですよ……」と言ったひとの声と佇いを、いまでもくっきりと覚えています。長谷川康子さんが、中也から（ここはチュウヤさんかな、……）小林秀雄のところに逃げていっちゃって、中原中也はそのお手伝いまでしたようなひとだったんですけど、そのときに「わたしは悔しいひとになった」そういう記述がありますね。だからわたくしの咄嗟に口にしました「壊れたひと」というのは、その口真似であったのかもしれない。

「ホラホラ、これが僕の骨だ」の次の連はこうでした。「それは光沢もない／ただいたづらにしらじらと、／雨を吸収する、／風に吹かれる、／幾分空を反映する。」なかなか微妙な行ですね。なんか自分の骨についてわたくしたちが考えるとその、……生々しい、あるいは血糊の付いたはずの「ヌックと出た、骨の先」、そうではなくって、こういう色はないのかもしれないですけど、中間白色というのか、寂しい立木の裸の丸太を見たとき

の刹那の印象のようにして顕れてくる中也さんの心の地肌を目にするような気さえする（これは書いてる時に当たってるなあと思ってましたけれどもね、……）その裸の丸太の肌が……ここはわたくしが喩の橋を架けているのですが、「生きてゐた時に、／これが食堂の雑踏の中に、／坐つてゐたこともある、／みつばのおしたしを食つたこともある、／と思へばなんとも可笑しい。」なんて言ってるのね、自分の骨のこと言うんですね。この「可笑しい」という言い方、さっきの「ホラホラ」に近いものがありますけれども、それには昼から夜までの中也さんの歩行の深さ、單純に何か目的があつてどこかに行くといふのではなくて、その深いところを目指して旅に歩いてゐるような感じだなあ、これ。横丁にも入つて行つたり、ただわけもなく振り向いたり（そういう詩もありますけどねえ）、立ち止まったりしてたんでしょね、ほんとど孤独な、たったひとりの舞踏者の^{おもかげ}倂を、中也（なかや）はこういうふうな、自分で自分の舞踏者の骨を思つて可笑しがっている。こういうところまで行っちゃうと、「孤独」とか「絶望」とかそういう言葉ではわからないことですよ。それで先に言つた中也の「これが食堂の雑踏の中に」っていう「これ」が、自分の骨が、……という意味なのでしょうけれども、ここを見た途端の、……名状しがたい戦慄を、わたくしはかすかに覚えていました。

「これ」は骨のことを指してはいるのですが、みなさんもお聞きになつたことはないですか？ 雑踏の中で

時折「これが」って言うじゃないですか。「この男が」「この子が」「この女が」っていう、その大昔からの人々が、そういう言い方をしてきたであらう、そのトーン、「これが……」。この何とも言えない口調やトーンを、十二時間の歩行を通しておそらく無意識に聞き取っている兆候を、いまわたくしが、聞き取っていたらしいことを聞き取っているのですね。それが……その「無限のエコー」のようなものが、なんとも言えずに、わびしく切ないのです……。で、その中也さんの「可笑しい」「ホラホラ」というこうした微妙な笑ひは、どうやら非常に深いもので、今から秋山駿さんの言われつづけてこられたことに入つて参りますが、秋山駿氏の八十年間の生涯を

通して、まあドストエフスキーや犯罪のこともやられましたけれども、中心にあったのは中原中也の歩行、中原中也がどうしてああいう人生を送ったかってそこをやっぱり思考の中心にされている。それを知っての「座談」での衝撃は、とても大きかったです。そこに自分の思考とか人生の意志を置きつづけてこられた秋山駿さんの言葉に戻ってみる前に、ふとさきほど書きとめました「中也の笑いはどうやら非常に深い、……」、わたくしはさっき気付いてそう言っていました、その「深さ」とは何か……。それはどこかにわたくしたちが目的があって歩いて行く、そうしたことをついつい考えますけれども、そうじゃないところに向って歩を進めていくことの途方もなさ、そこに深さを感じての発語だったのだと思います。この「直観の戸口」についてのひらめきを何とかさらにご説明を試みてみようと思います。それは「ホラホラ、これが僕の骨だ」に聞いた不思議な声、あるいはそのトーンを、わたくしたちの奥底にもどうやらあるらしい、なんと言おうか、明るくて外光性の空気の中で、その空気とともにそのように受け止めてみたいという心の働き、その「欲望」によって、こうした「ホラホラ」という外光に響くという非常に不思議な声だということを、その「欲望」によって聞いているらしいのです。こうして、そこまでは自分の判断を追っかけてみました。ただ、耳を澄まして——と書いてふっと思いだして、中也さんの大好きな詩「逝く夏の歌」に「山の端は、澄んで澄んで」という、なんのことはないんだけどこの「澄んで澄んで」に、なにか小さな謎があるなあっていう心に気が付くんですよ。どうしてか忘れたたいトーンの詩行があって、それを聞くその耳に口を開かせたい……。もう二回くらいペンディングにしていますのですが、……「ニーチェの耳」についてお話ししようとして、資料を何度も用意してきているのです。（本稿は「詩学」の三、四回目にあたる……。既に、「ニーチェの耳」の資料テキストは配布済みでした）その中でとてもおもしろい、デリダの言説からの引用を、『他者の耳』という本はじつにおもしろい書物でした……。紹介したいと思ってきて、躊躇をしていますがまだその機にあらざと……見送ってきていました。その稀なチャンスがいま来てい

るようにも思います……。 (言及は本書次回に)。「耳は語らない」という言い方をデリダはしています。しかしわたくしたちはそうして聞きながら、肯^{がえん}じながらも、わたくしたちの耳に口を開かせようとする。別の口、別の耳の聞いている聞き方に、口を開かせようとしている、語らせようとしている、そういうところへ、こうして辿り着きつつあって、そうしたことを考えてでしょう、こう言っておりました。こうして、「中也さんの歩行」を、見詰めているわたくしのやむにやまれぬ仕業、方法と言うよりも、耳に口を開かせようとしていることであつたのかもしれない。秋山駿さんの先程引いた直後の引用の続きです。

大正十二年より昭和八年十月迄。毎日々々歩き通す。読書は夜中、朝寝て正午頃起きて、それより夜の十二時頃迄歩くなり。——ほとんど一つの証言である。自分の生の事実を簡単な一葉のデッサンと化すようなこの数行の中で、「歩く」という事はかくも重い。歩行ということが、重要な生の事実として、詩作を除けばほとんど唯一の精神の行為として、はっきり再確認されているのだと思う。実際、彼はよく歩いていたらしい。歩行という事が、彼にあっては、現実の詩作の行為と重なり合っている。それは詩を作るという行為に等しい精神の無償の努力の何かであつた。自分は何者かと問う生の混乱の最中であつて、これを使い越えるために、ただただ自分の現実感だけを頼りにさまよい歩く、無意味な行為の歩行のそれと、あるいは、未だ形を成さぬ自己の生の混乱と無秩序に耐えて、仮のつかの間のものでも良いから、一つの純粹な生の声調に達しようとする (これが重要なところで、さっきの「トーン」を秋山さんはこういう言い方をされます)、これまた無意味な詩作の行為とは、ひどくよく似た同質の行為であるような気がする。中也の「歩くなり」を受けて、しばしば歩行の同伴者であつた大岡昇平が、こう解説している——「彼が『歩い』たのは京都東京横浜の場末の盛り場を出なかつたが、彼はこうした古風な漂泊の道を (これはマズイ言い方だな……これはだめだ) 詩作に必要な生活の一条件

と見做していた様である」。

（創元社版『中原中也詩集』解説）

さあ、わたくしたちは、この「歩くなり」の本当の歩行の仕草、形をなんとしてでも描き出す必要がある、……。形、仕草というよりも、秋山さんのいう「一つの純粹な生の声調」へと、「一つの作り上げられた生の光景」へと、こうしないと生きていくことにはならないのだぞ、……という本当の聲が聞こえてくるというよりも、それが話されている奇跡的な場面を、わたくしたちもまたそれを彫り出す、……と言ったらよいのか、掘り出すと言おうか、……造形すると言おうか、その宝石を掌（てのひら）に載せてみるという……おそらく書いていた中也さんも、それを唯一のものとして固定的に考えたんじゃないやなくて、おそらくわたしたち万人が心の底で描いているその描線（不思議な線を持っていそうだなあ、こうやっていくといつかレオナルド・ダ・ヴィンチまで行くかもしれないのね、……）を引き直し、変奏してみること、……。あるいはヒトによってはそうすることがかけがえのない命の作り方につながるものであるのかもしれないのだ。——これは中原中也の深い深い読み手になる、……あるいは（無用の……）「無にするような歩行の深み」へということ、ぼくは、別の言い方で言っているのかもしれない。

中也の詩の歩行を辿る

桜の精も、もうとうに足早に通り過ぎて行った、四月の下旬にしてはとても冷たい雨の降る……というよりも雨の吹いているような……昨日の大阪寒かったですよ。ちよっとすみません、中也（なかや）さんの筆をしばし休めて……。力を振り絞って十日間綴りました日本経済新聞の日曜版（ご参考にコピーしました）、それを手にして、これは唐十郎さんを、ストラスブール大学に奥さんとお連れをしまして、一緒に講演をするという離れ技

をやって、もしかするとストラスブル、パリ、ベルリンに、あの肉体論が爆発する日が来るんじゃないかっていうふうな思っ、そういうことをしてみたんですけれども、大阪の難波の廃校になった校舎（元精華小学校グランド）にふっと入って見たら、雨にぬれる紅（あか）テントが立っていて、なぜか胸をはっと突かれるような感じがしました。どうしてでしょうねえ。新宿や雑司ヶ谷なんかにあってもあんまり胸を突かれる思いはしなかったんだろ。うけれども。空き地（さら）か更地？ の地面に坐（すわ）って……そうか！ 土間（どま）の感じだ、……いいお芝居でしたよ。唐十郎さんの『黒手帳に頬紅を』っていう作でした。そこに入り込んでいった。潜（もぐ）り込んで、入り込むというのを久々にした、そういう感じなんです。わたしたちが映画館に行く時も、こう、戸を開けて、許されているように入り込みますけれども、こういう紅テントに入るっていう時は、潜り込むっていうか這入り込むっていう、犯罪をおかしているわけじゃないんだけれども、それが確実に身体に感じられます。それを久々にした。少し横道に逸れているはずなのに、中（な）也（なか）（なかや）さんだったら、これなんて言っただろうなあ。って。テントから出た時に「サーカス」だったのだろうか。って考えていました……。

サーカス小屋は高い梁（はり）（中也さん、見上げてたね……）／そこに一つのブランコだ（……）汚れ木綿の屋蓋（やね）のもと。

ここに汚れ木綿が出てくるんだね。この汚れ木綿っていうところに、「汚れつちまつた悲しみに」の汚れ（が）が出てきますよねえ。そう、中也さんのこの汚れが、茶色—エミリーの茶色（elemental Brown）にも近いような、懐かしい街の色というよりも、街の蒸気か煙（けむり）だ……それが、木綿みたいなひらがなで「ゆあーん、ゆあーん、ゆあゆあーん」とね。これは布（ぬい）がものを言っている感じがするね。ね。「ゆあーん、ゆあーん、ゆあゆあーん」。これ全部引っ張っちゃったらだめですよ、微妙にここで縮（ちぢ）んでる。若い詩人の岸田将幸さん、安川奈緒さんご夫婦を

お連れして打ち上げにも行きましたけれどね、そう、「今夜此処での一と殷盛^{さか}り／今夜此処での一と殷盛^{さか}り」これは「サーカス」の言葉ですけれども、わたしたちもまた中也（なかや）さんに似て、……なんだか、ここで、この「中也（なかや）さん」……少し、優しげで、少し、不良っぽいような空也（くうや）？　こうや？　こうや？　上人の面影と似てくるのは何故かしらね？　本当に、本当の生の蒸気を吸ったり吐いたり、そうしたところに（唐十郎さんの中也さんの影響受けてましたけれどもね）潜り込んでいましたところを、……今朝（二〇〇九年四月二十七日）大阪東急インの一室、此処が、それが横道にそれたところ、これも「通り」、そこで緩れたことが幸せでした。こういうふうにして、幸せというものは見つけれなくてはならない。この中也さんの皺の匂い、街の匂いの皺（しわ）の口（くち）のようなもの、「トーン」っていうようなものは、こんな述懐からきているというか、こんなふうにして「往一來（ⅡエクステンジⅡ交換）」しているのです。これはわたくしも詩を書く時の技法として、こういう言葉を……「皺」を使って説明をしていましたけれども、それだけじゃないですね。こういうことを小林秀雄に手紙で書いていました。

生きることは老の皺を呼ぶことになる。同一の理で想ふことは想ふこととしての皺を作す。想ふことを想ふことは出来ないが想つたので出来た皺に就いては想ふことが出来る。私は詩はこの皺に因るものと思つてゐる

（一九二七年小林秀雄に送った「皺」の理論）

おもしろいね、これね。こういうふうにして、「皺の理論」なんて自分で書くから、わたしたちは騙されちゃうのね。この皺っていうのは、わたしたちは形状を思い浮かべちゃう、ある種の病気なんだけれども、ついつい科学的に筋を通して理論のように考えてしまうのですが、そうじゃないんですね。この皺、あるいは皺皺こそが、